

# 3つのESL/EFLテキストの英語音声スクリプトの検証

上 村 俊 彦

A study of audio scripts in three ESL/ EFL texts

Toshihiko UEMURA

## Abstract

Audio CDs and their audio scripts are essential components of English textbooks. Examined in this article are audio scripts which derive from three ESL/EFL textbooks, *American Headway 4, 2nd ed.* (OUP), *Life 5* (Cengage Learning), and *Unlock listening & speaking skills 4* (CUP). The three audio scripts are converted into electronic forms, and POS-tagged. Using corpus data analyzing software, WordSmith V7, their frequent words and common syntactic patterns are analyzed from the viewpoint of English learning resource for blended learning.

**Keywords:** blended learning, ESL/EFL, audio script

## 1. はじめに

学習者が選んだ時、場所、ペースでおこなうオンライン学習と、教室で学習者と教授者が対面式でおこなう学習とが連携した学習形態であるブレンディッドラーニング (blended learning, BL)<sup>1)</sup> は、多くの教育者や研究者の興味を集めている。ブレンディッドラーニングを応用した外国語教育における反転授業の有効性や課題について考察した研究には、船守 (2014) や藤代 (2009)<sup>2)</sup> がある。

英語教育の担当者として英語クラスのオリエンテーションをする際、英語学習の成果は自発的な学習が重要であること、また自律学習のキーとなるのは使用する英語テキスト (以下、テキスト) の音声教材を十分活用することを、毎学期話すことにしている。英語教材の選定時には、開講クラスの目的 (外国語学習技能「読み」、「書き」、「聞き」、「話す」の領域でフォカスされる領域)、担当クラスの履修予定者の大まかな英語到達度などをもとに、テキストの英文 (特に、リーディング部分と音声教材スクリプトを含むリスニング部分) の難易度やテキスト構成にも留意している。しかし、多くの出版社から多様なテキストが毎年出版されているため、クラス開始以前にテキストの英文全体を検証することは難しい。

本稿では、通常の学期開始時には時間的な制約から困難であるテキストの音声教材スクリプト全体の検証をブレンディッドラーニングの観点から試みる。

## 2. BL視点から見た現代インターネット事情

論文検索サイトCiNiiで「ブレンディッドラーニング」を検索すると、ICT、Moodle、e-learning、言語学習（日本語、英語、中国語等）などのキーワードを含む182件の論文がヒットした。<sup>3)</sup>

blended learningをキーワードにして英文ウェブサイトを検索し、ヒットした多くのサイトから情報コミュニケーション技術を応用して高等教育の改革をおこなうEDUCAUSE®<sup>4)</sup>の活動に着目した。EDUCAUSE®の調査や研究に関する公開資料を概観すると、教室と遠隔地とをビデオ会議システムでつないだ授業事例（Hains-Wesson et al., 2015）、学習管理システム（Learning Management Systems, LMS）による授業事例（Dashstrom et al. 2014, Feder et al., 2016）などとともに、モバイル機器を活用する次世代学習環境に関する研究事例（Brown, et al., 2015; Dahlstrom, et al., 2014; Dziuban et al., 2015）など、近年の情報通信技術（information communication technology 以下、ICT）の発展に裏付けられた高等教育の充実に関した調査や研究が多数ある。

ICTの発展やインターネット環境の充実は、CourseraやedXなどのさまざまな広域開放型オンライン講座（massive open online courses, 以下、MOOC）を可能としている。4大学（北海道教育大学、東京学芸大学、愛知教育大学、大阪教育大学）によるオンライン協同学習プラットフォームCollaVODは、外国語の新しい授業学の実践や研究の推進を目的として構築された。CollaVODの基本機能は、VOD学習、TV会議、講義配信、COLT（授業のコミュニケーション性を定量化する分析法）の4つから構成されており、新しいMOOCのプラットフォームとして活用できそうである。ちなみに、CollaVODは、2016年4月から高等研究機関などを中心に利用可能となっている。

近年、PC（ラップトップ含む）に加えてモバイル端末機器（スマートフォン、タブレット）が広く使われるようになって、インターネット利用環境が大きく変化している。Indiana大学とPurdue大学の共同プロジェクトでは、複数の協同学習プラットフォームの機能やその操作性について検討し、ZoomとAdobe Connectとに候補を絞り込んだが、予算面の制約から最終的にはZoomが選択された。なお、同プロジェクトでは、学習者がインターネットにアクセスする主要な機器は、iOSまたはAndroidで稼働するスマートフォンやタブレットを想定している。（Feder et al., 2016）

モバイル端末機器を用いたインターネット利用の増加は、日本でも顕著である。15～69歳の男女各550名を対象としたモバイルとソーシャルメディア使用に関するジャストシステムの調査（2016年1月時点。ジャストシステム, 2016a）によると、(Q1)「ネット接続に利用する機器」の上位は、ノートパソコン（63.4%）ついでスマートフォン（59.1%）で、両者は僅差となっている。また、同社の10代男女各300名（総数600名）を対象としたスマートフォン利用状況調査（ジャストシステム, 2015）では、(Q4)「各種メディア利用」のうち、「パソコンからのインターネット接続」を「利用しない」スマートフォンユーザーは29.5%にのぼる。さらに、15～59歳までの522名を対象にした「スマートフォンとライフスタイルに関する実態調査」（ジャストシステム, 2016b）によると、(Q1)「スマートフォン利用後のパソコン利用時間」が、「すごく減った」、「明らかに減った」、「少し減った」と回答した割合は、14.9%、21.1%、16.3%であった。スマートフォンを使ってインターネット接続する時間が多くなったと回答した人は、上記の単純合計では52.3%にのぼる。

モバイル端末機器を利用したインターネットアクセスの増加と並行して、オンラインサービスも充実してきた。教師が学生と教材資料を共有したり、両者間で連絡を取るなど、ブレンディッドラーニングの環境としてオンラインサービスの利用も検討できる段階になってきた。身近なオンラインサービスとしては、オンラインストレージ（GoogleDrive、Dropbox、SkyDrive等）、

Web会議システム(ReadyCast、WebEx、V-Cube、Meeting Plaza、Live On等)、ソーシャルネットワーク (Facebook、Line、Twitter等) などがあり、無償または比較的到低価格で利用できる。また、15～59歳の日本人男女のソーシャルメディア利用を調べたジャストシステム (2016a) によると、(Q10)「現在利用しているソーシャルメディア」は、順にYoutube (69.3%)、Line (47.3%)、Twitter (35.4%)、Facebook (34.2%)、ニコニコ動画 (32.0%)、Google+ (17.3%)、Instagram (13.1%)、Mixi (12.6%)、Ustream (7.9%)、Pinterest (3.5%)、LinkedIn(2.7%)であった。多くの調査対象者が、YoutubeやLineを利用していることがうかがえる。同調査によると、Youtubeは各世代ともに高い使用率であるが、Twitterは特に若い世代 (15～19、20～24、25～29歳) で利用率が50%以上と高い。また、Lineの世代別利用率は20%台から80%台に分布しているが、Twitterの場合と同様に特に若い世代で利用率が高い。<sup>5)</sup> 動画配信 (Youtube)、ファイル共有 (オンライン・ストレージの利用) や情報共有 (Line) などは、上述の情報機器の利用状況から見てブレンディッドラーニングのツールとして利用可能であろう。

### 3. 音声スクリプト

イギリスのESL/EFL教材出版社のテキストの多くは、ヨーロッパ言語共通参照枠 (Common European Framework of Reference for Languages, CEFR) に準拠してテキストレベルを明示している。本稿で検証対象とするオックスフォード大学出版の*American Headway* (以下、AmH)、Cengage Learning の*Life*、ケンブリッジ大学出版の*Unlock: Listening & speaking skills* (以下、Unlock) は、CEFR A1レベルからB2またはC1までの各レベルに対応するシリーズタイトルを出版している。(Table 1参照)

Table 1. 3テキストのCEFRレベル

	CEFR	CEFR	CEFR	CEFR	CEFR
AmH 5	C1	Life 5	C1		
AmH 4	B2-C1	Life 4	B2	Unlock 4	B2
AmH 3	B1-B2	Life 3	B1	Unlock 3	B1
AmH 2	A2-B1	Life 2	A2	Unlock 2	A2
AmH 1	A1-A2	Life 1	A1	Unlock 1	A1

上記の3つのテキストのコンテンツやオンラインリソースの評価を、学生の自律学習の視点から、テキスト中に音声教材スクリプト (audio script, video script) や主な文法事項の概観ができるページ (grammar summary/reference) の有無、テキスト準拠の独自オンライン学習サイト (practice website) の有無、テキストの音声教材 (MP3 download) のダウンロード可能性について整理したのがTable 2である。

video scriptはUnlockのみに、文法ページはgrammar referenceがAmHに、grammar summaryがLifeのテキスト中にある。その他のコンテンツやリソースについては、3テキストは同様な対応状況である。

Table 2. テキストコンテンツとオンラインリソース

	AmH	Life	Unlock
audio script	+	+	+
video script			+
grammar summary/ reference	+	+	
practice website	+	+	+
MP3 download	+	+	+

+利用可

すでに見たように、3社テキストはCEFRレベル (A1 ~ C1) に対応したものであるが、本稿で検証する音声教材スクリプトはB2 (またはB2 ~ C1) レベルのテキスト (AmH4, Life5, Unlock4) に限定する。ちなみに、TOEFL iBTスコアとCEFRレベルの相関について調べた Papageorgiou, et al. (2015)によると、B2はTOEFL iBTスコアで72 ~ 94점에相当する。(Table 3参照。)

Table 3. CEFRレベルとTOEFL iBT®カットスコア

CEFR level	Reading (0-30)	Listening (0-30)	Speaking (0-30)	Writing (0-30)	total (0-120)
C2	25				
C1	24	22	25	24	95
B2	18	17	20	17	72
B1	4	9	16	13	42
A2			10	7	
A1			5		

出典：Papageorgiou, et al. (2015)

B2 (またはB2 ~ C1) レベルのテキストを使用する学習者が、実際にどのような英語を聞いているのかを明らかにするために、テキスト巻末の音声教材スクリプトを電子ファイル化して分析を試みた。ちなみに、3社の音声教材スクリプトは、会話やモノログからなる話し言葉で構成されている。音声教材スクリプトは、電子ファイル化した後にランカスター大学のPOSTAGER (CLAWS7) を使い、品詞 (POS) タグ付きとした。音声教材スクリプトに頻出する英語の語彙や文法事項を調べるために、POSタグ付とPOSタグなしの2種類のテキストファイルを、Scottの語彙分析ソフトウェアWordSmith Tools V.7 (以下、WS7) で分析した。

### 3.1 語彙

3つの音声教材スクリプトで、延べ語数 (token)、異なり語数 (type) とともに最も語数が多かったのはAmH4、最も少なかったのはLife 5であった。(Table 4参照)

Table 4. 音声教材スクリプトの語数

	AmH 4	Life 5	Unlock 4
tokens	24690	11117	21995
types	3108	2162	2894

音声教材スクリプトに出現する語彙特性を明らかにするために、2016年に刊行された『大学英語教育学会基本語リスト新JACET 8000』（以下、JACET8000）をWS7のWordlist出力時のストップリストとして用いた。JACET8000は、出現頻度順に英語語彙8000語を8レベル（J1：頻度順第1～1000位、（中略）、J8：頻度順第7001～8000位）に分類している。

JACET8000による3音声教材スクリプトの異なり語のカバー率は、J1からJ4までの頻度上位4000語で46～54%前後、J1 からJ8までの全8000語でも60%未満であった。（Figure 1参照）なお、JACET8000による音声教材スクリプトのカバー率は、（JACET8000によってカバーされたtype数）÷（総type数）×100で算出した。JACET8000は、地名、人名などの固有名詞、数詞の大多数、省略形（例：DVD, UA）等を含んでいないことが、カバー率60%未満となった要因と考えられる。

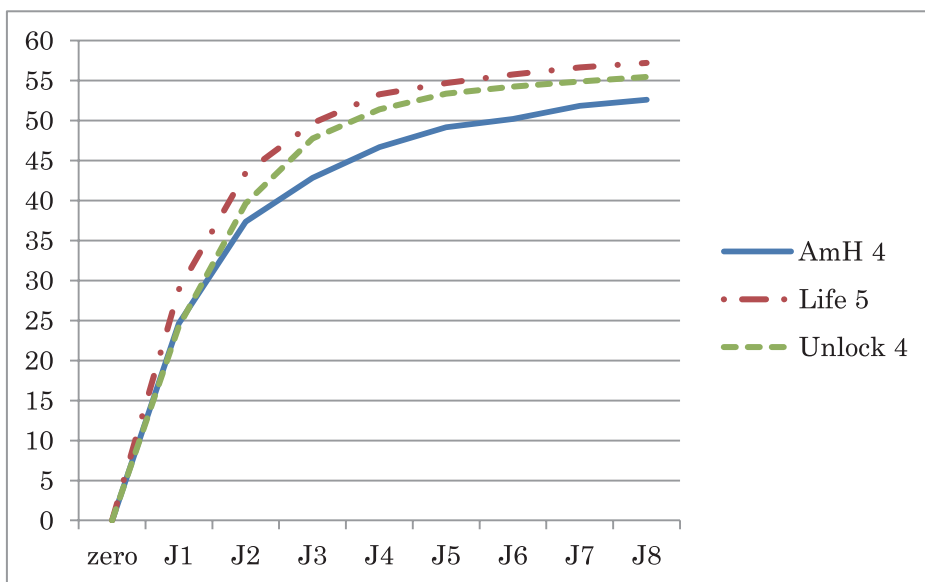


Figure 1. JACET8000によるカバー率

JACET8000によるカバー率が最も低かったAmH4についてみると、J1～J4(上位4000語)でカバーできなかった異なり語数は1557語であった。ただし、英文10万語中に10回以上の出現率<sup>6)</sup>で実際の出現回数を換算し、地名、人名、数詞などの異なり語を除くと該当する異なり語は34語となった。（Table 5参照）そのうちで、JACET8000に存在しない異なり語は、14語（Amish, dirt, DVD, fluffy, fourteenth, gonna, gotta, hostel, karate, pickpocketed, snowstorm, tram, triplet, TV<sup>7)</sup>）のみとなる。

Table 5. J1～J4でカバーされない語数

JACET8000順位	語数
4001～5000	9
5001～6000	4
6001～7000	6
7001～8000	1
（未掲載）	14

## 3.2 文法事項

Oxford University PressのBookworms、Macmillan EducationのMacmillan Readers、Pearson-LongmanのPearson English Readersなどは、英語学習者の習熟度に合わせた英語多読用リーダーとして知られている。英語多読用リーダーに使用される語彙や文法事項は、Van Ek and TrimによるWaystage、Threshold、Vantageなどの先行研究が参考とされている。(Van Ek and Trim, 1998a, 1998b, 2001)

上村(2014)は、同上の先行研究結果に準拠したPearson LongmanのPenguin Readers Grading of Languageについて検証したものである。<sup>8)</sup> 現在、Penguin readers grading of languageのレベル別の語彙や文法事項に関する制限は、Pearson English Readers Grading System (以下、Pearson GS)に継承されている。

Table 2でみたように、AmH4はB2～C1レベルの、Life5はB2レベルの英語学習者が習熟すべき文法事項を整理したページがある。Table 6は、AmH4とLife5の文法ページから日本の高校英語レベルとなる文法事項を中心に抽出し、Pearson GSにもとづく習熟度レベルを記載したものである。ただし、Pearson GSでLevel 3表記となったものは、日本の中学英語で学習する文法事項である。(文部科学省, 2009a, 2009b参照。)

Table 6. 文法事項

	AmH 4	Life 5	Pearson GS <sup>*</sup>
present perfect	+	+	L3
present perfect continuous	+	+	L4
past perfect	+	+	L4
past perfect continuous	+	+	L5
modal verbs in the past	+ <sup>1)</sup>		L6
future perfect	+	+	L6
future continuous	+	+	L5
1st conditional	+	+	L3
2nd conditional	+	+	L4
3rd conditional	+	+	L5
mixed conditionals		+ <sup>2)</sup>	L6
wish, would/'d rather, if only	+	+	L6
defining relative clauses	+	+	L3
non-defining relative clauses	+	+	L4
reduced relative clauses	+	+	L5

\* Pearson English Readers Grading System

1) *It must have been a good party. You should have listened to my advice.*

2) *If the pro-forest organization didn't exist, more of the Amazon forest would have disappeared.*

Pearson GSによると、Level 3はPre-Intermediate—1200 head words, A2、Level 4はIntermediate—1700 head words, B1、Level 5はUpper Intermediate—2300head words, B2、Level 6はAdvanced—3000 head words, C1である。この基準によると、過去完了進行形 (past perfect continuous)、仮定法過去完了 (3rd conditional)、関係詞を省略した関係詞節 (reduced relative clauses) などが、B2レベ

ルの文法事項となる。

### 3.2.1 過去完了

コーパス言語学の視点から4領域（会話、フィクション、ニュース、学術）の英文を分析した Biber, et al. (1999) によると、had+beenは4領域すべてで出現頻度が多い。(pp.468-9)

Table 7は、単純過去完了(had+Vpp)、過去完了進行形(had+been+Ving)、過去完了受動態(had+been+Vpp) の3テキストにおける出現頻度回数を示す。各テキストにおける過去完了表現の頻度は限られている。過去完了進行形については、AmH4(4)、Life5(0)、Unlock4(0)であった。学習者の過去完了の進行形や受動態に対する理解を深めるためには、学習支援者である教授者がテキスト本文または文法ページの記述を発展させて教授することが必要である。

Table 7 過去完了

	had+Vpp	had+been+Ving	had+been+Vpp
AmH4	13	4	2
Life5	7	0	1
Unlock4	4	0	1

### 3.2.3 助動詞+have+過去分詞

動詞句（助動詞+have+過去分詞）は、仮定法過去完了（3rd conditional）と助動詞をともなった過去時制表現（modal verbs in the past）中に現れる。Pearson GSによると、前者はLevel 5、後者はLevel 6である。

Table 8. 助動詞+have+過去分詞

	AmH4	Life5	Unlock4
*_VM have_VHI *_VVN	31	5	5
*_VM have_VHI been_VBN	16	5	3
*_VM have_VHI done_VDN	0	0	0
*_VM have_VHI had_VHD	0	0	0

例：(AmH4) He\_PPHS2 might\_VM have\_VHI worn\_VVN ...

この動詞句は、AmH4が最も多く出現している。(Table 8参照。) また、過去分詞の中で出現頻度が最も多かったのは、beenでAmH5(16)、Life5(5)、Unlock4(3)であった。(数字は出現頻度)

許可/可能性の助動詞 (may, might)、義務/必然の助動詞 (must, should)、過去時制指向の助動詞 (could, would) は、完了形 (have+過去分詞) と強い共起関係にある。(Biber, et al., 1999, p.499) この動詞句の共起関係に習熟するためには、学習者が音声教材を聞くだけでは不十分である。教授者が文法ページやテキスト本文の使用例を使って事前に学習者の注意を喚起するなど、学習者に対する支援が必要である。

### 3.2.3 関係節

Pearson GSでは、関係節は制限用法(L3)、非制限用法(L4)、関係詞省略(L5)の3レベルにわたる。

Hawkins and Filipović (2012: pp.34-35)では、英語学習者が書いた英文エッセーをCEFRレベルご

とに分類した先行研究に言及している。B1レベルを除くCEFR各レベルの英語学習者のライティングでは、先行詞が主格の関係節(subject RCs)は先行詞が目的格の関係節(object RCs)の場合よりも2倍以上の割合で出現している。この傾向は、3テキストの音声スクリプトでは認められなかった。なお、前置詞付き関係節(indirect/ oblique RCs)を上記2種類の関係節に加えた場合でも、前置詞付き関係節の出現率は最大でも5%未満に留まる。(Table 9参照)

Table 9. CEFRレベルと関係節タイプの出現率(%)

	A2	B1	B2	C1	C2
subject RCs	67.74	61.05	71.11	70.35	74.80
object RCs	30.65	37.33	26.09	25.02	20.90
indirect/ oblique RCs	1.61	1.62	2.80	4.63	4.30

RC =relative clause

Biber et al.(1999)によると、関係詞 (which, who, whom, whose, that, where, when, why) の中で、広く一般的に出現するのは3つの関係詞 (who, which, that) である。領域別に見ると、会話やフィクションではthat、ニュースではwho、学術ではwhichの出現頻度が最も多い。(pp.609-611)

WS7に3テキストのPOSタグ付きテキストファイルをインプットし、先行詞が主格となる制限用法の関係節 (Table 10参照)、先行詞が目的格となる制限用法の関係節 (Table 11参照)、非制限用法の関係節 (Table 12参照) の出現頻度を調べた。

Table 10. 制限用法の関係節 (先行詞は主格)

	AmH4	Life5	Unlock4
who_PNQS	16	14	26
that_CST	12	20	41
which_DDQ	4	7	1

例：(AmH4) ...to\_ll all\_DB those\_DD2 wonderful\_JJ  
people\_NN who\_PNQS voted\_VVD ...

Table 11. 制限用法の関係節 (先行詞は目的格)

	AmH4	Life5	Unlock4
whom_PNQO	0	0	0
that_CST	19	12	15
which_DDQ	0	1	0

例：(AmH4) The\_AT book\_NN1 that\_CST I\_PPIS1  
'm\_VBM ...

Table 12. 非制限用法の関係節 (先行詞は主格または目的格)

	AmH4	Life5	Unlock4
,_ who_PNQS <sup>1</sup>	6	2	0
,_ whom_PNQO <sup>2</sup>	0	0	0



_, which_DDQ <sup>1</sup>	11	7	17
_, which_DDQ <sup>2</sup>	0	0	2

1 先行詞は主格

2 先行詞は目的格

例：(Unlock 4) ... Spain\_NP1 's\_GE capital\_NN1 \_,  
which\_DDQ is\_VBZ ...

3テキストともに、先行詞が主格となる制限用法の関係節ではwhoまたはthat、先行詞が目的格となる制限用法の関係節ではthat、先行詞が主格となる非制限用法の関係節ではwhichが、最も高頻度で出現している。

関係詞を伴わない過去分詞または現在分詞が主要素となる不定関係節（以下、不定関係節）の出現頻度を調べるために、WS7でPOSタグ付きのAmH4テキストファイルに現れる名詞と現在分詞との語連結（\*\_NN1 \*\_VVG, \*\_NN2 \*\_VVG）、または名詞と過去分詞の語連結（\*\_NN1 \*\_VVN, \*\_NN2 \*\_VVN）とを抽出した。Table 13の数値は、順に該当の語連結、不定関係節の出現回数を示す。

Table 13. 名詞+分詞

	AmH4	Life5	Unlock4
名詞+現在分詞	20(10)	7(0)	24(14)
名詞+過去分詞	20(11)	7(2)	25(10)

例：(AmH4) Look\_VV0 at\_II that\_DD1 car\_NN1 trying\_VVG  
to\_TO park\_VVI !\_!

例：(AmH4) The\_AT original\_JJ station\_NN1 built\_VVN in\_II  
1871\_MC cost\_VV0 \$6.4\_NNU million\_NNO .\_.

WS7による名詞+分詞の出力データ中で不定関係節だったのは、多い順にUnlock4(24)、AmH4(21)、Life5(2)であった。出力データには、名詞の後に続く不定関係節ではなくて、その他の節構造の一部と解釈すべき場合<sup>9)</sup>が多く存在した。英語学習者が、名詞（句）の後に続く不定関係詞とその他の分詞をともなった節構造との違いに習熟するためには、英語教師による支援が必要である。英語教師が関係節について教授する際には、テキストや音声教材中の該当事例、テキストの文法概要（AmH4のgrammar reference、Life5のgrammar summary）などを関連付けて学習者の理解を助ける必要がある。

#### 4. 終わりに

本稿では、コーパス言語学の手法を用いた英語音声教材の分析結果を応用して、英語教員はB2（あるいはB2～C1）レベルの英語学習者の学習支援をどのようにおこなうことができるかについて検討した。

本稿で取り上げたESL/EFL英語テキストの出版社以外にも、英語学習者が教室外で自律した英語学習を行う際に有益なデジタルコンテンツの提供やテキスト学習サイトを開設している出版社も多数ある。英語教師は、テキスト、テキスト付属の音声教材（音声スクリプト含む）などの教材コンテンツの理解を深めることが必要である。すでにみたように、最近のICT技術の発展や

インターネット環境の充実は、英語のブレンディッドラーニングにも新しい視座や可能性をもたらす。英語教師の教材コンテンツに関する専門的な洞察や知見は、英語教師による教室英語指導や自律学習支援のために不可欠である。

B2 (あるいはB2 ~ C1) レベルの英語学習者の語彙力は、JACET8000の上位4000語以上であるかどうかについては、本稿では十分に検証できなかった。機会を改めて改めて考察したい。

なお、CLAWS7のPOSタグ付けは、おおむね信頼できるものであったが、名詞+現在分詞 (または過去分詞) については、明らかなPOSタグ付けのエラーも散見された。たとえば、次の例の called\_VVNは、過去形の動詞 (VVD) でなければいけない。

I\_PPIS1 was\_VBDZ just\_RR getting\_VVG ready\_JJ to\_TO go\_VVI out\_RP today\_RT when\_CS my\_APPGE grandmother\_NN1 called\_VVN to\_TO chat\_VVI. (下線 筆者)

不正確なPOSタグ付けについての対応については、先行研究にあたり今後の参考としたい。

### 註

1. Clayton Christensen Institute を創設したClayton Christensen教授の定義による。(http://www.christenseninstitute.org/blended-learning-definitions-and-models/)
2. 藤代(2009)は、岡山県下の中学、高校の研究指定校で行われた英語教育におけるブレンディッドラーニングの研究事例である。教師・学生の対面授業を補完する英語のリスニング教材を用いた学習者の自律学習では、リスニング力の向上とともに、英語口頭能力 (音読や自律発話の力) について統計学上有意な結果が得られた。また、学生の性格特性に基づく4グループ中で、「内向的で問題解決に向けられた知識の少ない」グループでは最も多くの音読力評価項目で、「社会性のある」グループでは自由発話評価項目の「聴解・反応」で有意な上昇が見られた。
3. 以下は、CiNiiで「ブレンディッドラーニング」を検索した結果のうち、「出版年:新しい順」の第1位から5位までの検索結果。(2016年9月30日現在)

検索結果: 181件中1-20を表示

1 2 3 4 5 6 ... 10 >

すべて選択: 新しいウィンドウで開く 実行 20件ずつ表示 出版年:新しい順 表示

- 1 **ブレンディッドラーニングによる言語調整能力の育成: 日本語教師教育現場から**  
伊藤(横山)美紀, 伊藤 亜, 木塚 愛ゆみ  
人文論究 (85), 21-28, 2016-03
- 2 **学習行動の特徴分析による成績不振者の早期発見手法の検討 (2015年度 第6回研究会 21世紀型能力と情報教育/一般)**  
長谷川 理, 新村 正明, 鈴木 啓文 [他]  
教育システム情報学会研究報告 = JSISE research report 30(6), 41-48, 2016-03
- 3 **Webベースのラーニングシステムを用いた授業改善: Moodleでの映像公開により自主学習の強化を試みた技術教育の効果測定**  
横山 さつき, 中川 雅人, 菊池 啓子, 井村 保, 新井 康友, 浅野 俊和, 水野 友希, 馬場 美穂  
中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要 (17), 159-164, 2016-03  
機関リポジトリ
- 4 **初級中国語ブレンディッドラーニング用教科書及びその指導法と評価方法の設計方針**  
趙 秀敏, 張 立波, 上野 祐弘, 今野 文子, 三石 大  
東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要 = Bulletin of the Institute for Excellence in Higher Education, Tohoku University (2), 281-295, 2016
- 5 **大学初級中国語ブレンディッドラーニングのためのスマートフォン利用度習教材の設計 (2015年度 第4回研究会 新技術の開発と活用による次世代教育・学習環境のデザイン/一般)**  
趙 秀敏, 富田 昇, 今野 文子 [他]  
教育システム情報学会研究報告 = JSISE research report 30(4), 3-8, 2015-11

4. EDUCAUSE®は、情報工学技術を応用して高等教育の改革をおこなうことを目指す非営利団体である。(http://www.educause.edu/about/mission-and-organization)
5. (株) ジャストシステム (2015) のQ4では、10代の既存マスメディア (「テレビ」、「ラジオ」、「新聞」、「雑誌」) の利用状況も調べている。4マスメディアを「使用しない」と回答した比率は、それぞれ3.8%、71.7%、67.1%、59.4%であった。10代調査対象者600名は、「ラジオ」、「新聞」、「雑誌」を約60%あるいはそれ以上の高率で利用していない。
6. 該当語 (出現頻度数) が英文テキスト (総語数) に占める割合は、0.001%になる。
7. JACET8000の頻度順位4001 ~ 8000の語は以下の通り：  
4001 ~ 5000位 (9語) shed (4036), junk (4039), scarf (4068), transplant (4364), download (4487), silly (4546), heel (4631), penny (4774), backyard (4935)  
5001 ~ 6000位 (4語) nephew (5026), reunion (5117), goodness (5838), gorgeous (5974)  
6001 ~ 7000位 (6語) pillow (6062), bald (6328), plaza (6394), tractor (6463), polo (6491), drip (6591)  
7001 ~ 8000位 (1語) hilarious (7990)
8. Pearson English Readersは、従来、Penguin Readersとして出版されていた。上村(2014)は、Pearson LongmanのPenguin readers grading of languageについて検証した。  
<http://www.penguinreaders.com/pr/teachers/grading-of-language.html>
9. 以下は、不定関係節と考えられない名詞+現在分詞 (または過去分詞) の例。  
(下線筆者。)  
進行形 (How's the new job going?)  
受動態 (What was his book called?)  
get+名詞+過去分詞 (... a lot of time in getting the product made ...)  
have+名詞+過去分詞 (I used to have my hair cut every Friday.)  
have+名詞+現在分詞 (... had lion cubs jumping around the safari bus...)

#### 参考文献

(URLは2016年10月21日現在)

(和文)

- 大学英語教育学会 基本語改訂特別委員会編著(2016). 『大学英語教育学会基本語リスト新JACET 8000』東京：桐原書店。
- 藤代昇丈(2009). 「ブレンディッドラーニングによる授業実践とその効果—外国語学習におけるeラーニングの活用—」岡山県総合教育センター『研究紀要第3号』pp.1-20
- 船守美穂(2014). 「反転授業の可能性と課題：外国語教育において反転授業は有効か」外国語教育メディア学会関東支部 『第133回研究大会発表要領』 pp.46-51.
- 株式会社ジャストシステム(2015). 「10代のスマホ利用状況に関するアンケート調査 Fastask 株式会社ジャストシステム. pp.1-43.  
[https://marketing-rc.com/?p=3585&preview=1&\\_ppp=18a304b9dd](https://marketing-rc.com/?p=3585&preview=1&_ppp=18a304b9dd)
- 株式会社ジャストシステム(2016a). 「モバイル&ソーシャルメディア月次定点調査」(2016年1月度) Fastask 株式会社ジャストシステム. pp.1-132.  
[https://www.justsystems.com/jp/download/contents/fastask/biz/report/fa\\_report-monthly-20160204.pdf?\\_ga=1.4262195.1849807754.1474001183](https://www.justsystems.com/jp/download/contents/fastask/biz/report/fa_report-monthly-20160204.pdf?_ga=1.4262195.1849807754.1474001183)

- 株式会社ジャストシステム(2016b).「スマートフォンとライフスタイルに関する実態調査【前編】  
Fastask 株式会社ジャストシステム. pp.1-34.  
[https://marketing-rc.com/?p=3633&preview=1&\\_ppp=a810b075d2](https://marketing-rc.com/?p=3633&preview=1&_ppp=a810b075d2)  
<http://www.edu-ctr.pref.okayama.jp/chousa/kiyou/h21/09-05.pdf>
- 文部科学省 (2009). 中学校学習指導要領 第2章 第9節 外国語 (平成24年4月施行)  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/gai.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/gai.htm)
- 文部科学省 (2009a). 高等学校学習指導要領 (平成25年4月施行)  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_\\_icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1304427\\_002.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1304427_002.pdf)
- 上村俊彦 (2014b).「グレイデッド・リーダーの語彙と文法」長崎県立大学国際情報学部『研究紀要』第15巻pp.171-184.

(英文)

- Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S. and Finegan, E. (1999). *Longman grammar of spoken and written English*. Harlow: Pearson Education Limited.
- Brown, M., Dehoney, J. and Millichap, N. (2015). The next generation digital learning environment: A report on research. Educause Learning Initiative.  
<https://library.educause.edu/~media/files/library/2015/4/eli3035-pdf.pdf>
- Dahlstrom, E., Brooks, D. C. and Bichsel, J. (2014). The current ecosystem of learning management systems in higher education: Student, faculty, and IT perspectives. Louisville, Co.  
[https://library.educause.edu/resources/2014/9/~link.aspx?\\_id=29AB65BAB3A1456D8A7E489B30E1736F&\\_z=z](https://library.educause.edu/resources/2014/9/~link.aspx?_id=29AB65BAB3A1456D8A7E489B30E1736F&_z=z)
- Dimond-Bayir, S. (2014). *Unlock listening & speaking skills 4*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dummet, P, Hughes, J. and Stephenson, H. (2012). *Life 5*. Boston: Cengage Learning.
- Dziuban, C., Picciano, A.G. (2015). The evolution continues: Considerations for the future of research in online and blended learning. *Ecar research bulletin*, June 17, 2015. pp.1-18.
- Educational Testing Service (2015). Test and score data summary for TOEFL iBT® January 2015 – December 2015 test data. Princeton: Educational Testing Service  
[https://www.ets.org/s/toefl/pdf/94227\\_unlweb.pdf](https://www.ets.org/s/toefl/pdf/94227_unlweb.pdf)
- Feder, E.M., Khan, I., Mazur, G., Vernon, T., Janke, T., Newbroug, J.R., Shuck, L. Zhu, L. and Varma-Nelson, P. (2016). Accessing collaborative online learning with mobile technology in cyber peer-led team learning  
<http://er.educause.edu/articles/2016/4/accessing-collaborative-online-learning-with-mobile-technology-in-cyber-peer-led-team-learning>
- Hains-Wesson, R., McKenzie, S. and Bangay, S. (2015). Anytime and anywhere: A case study for blended learning. *Educause Review*. pp.1-11.  
<http://er.educause.edu/articles/2015/7/anytime-and-anywhere-a-case-study-for-blended-learning>
- Hawkins, J. A., and Filipović, L. (2012). *Criterial features in L2 English: Specifying the reference levels of the Common European Framework*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Papageorgiou, S., Tannenbaum, R.J., Brent Bridgeman, B. and Cho, Y. (2015). The association between TOEFL iBT® test scores and the Common European Framework of Reference (CEFR) Levels. Princeton: Educational Testing Service. pp.1-23.

<https://www.ets.org/Media/Research/pdf/RM-15-06.pdf>

Soar, J & L. (2009). *American headway 2nd ed. 4*. New York: Oxford University Press.

Van Ed, J.A. and Trim, J.L.M. (1998a). *Waystage1990*. Cambridge: Cambridge University.

Van Ed, J.A. and Trim, J.L.M. (1998b). *Threshold 1990*. Cambridge: Cambridge University.

Van Ed, J.A. and Trim, J.L.M. (2001). *Vantage 1990*. Cambridge: Cambridge University.

#### Online resources

北海道教育大学HATOプロジェクトCollaVOD

<http://CollaVOD.hokkyodai.ac.jp>

Adobe Connect Mobile

<http://www.adobe.com/products/adobeconnect/apps/adobe-connectmobile.html>

Pearson English Readers Grading System

[https://readers.english.com/sites/default/files/Language-Features-by-Level-Graded-and-Active-Graded-and-Active-Professional-Learning\\_0.pdf](https://readers.english.com/sites/default/files/Language-Features-by-Level-Graded-and-Active-Graded-and-Active-Professional-Learning_0.pdf)

